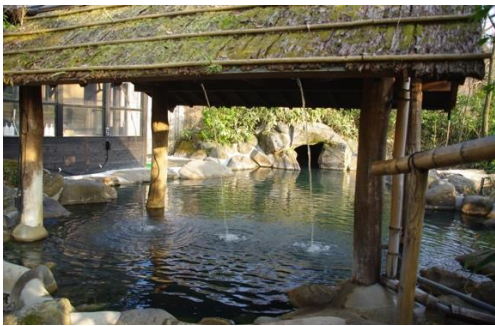


【日本知名温泉】(三) 黒川温泉(熊本県)-自然景観と温泉街を「一つの旅館」に

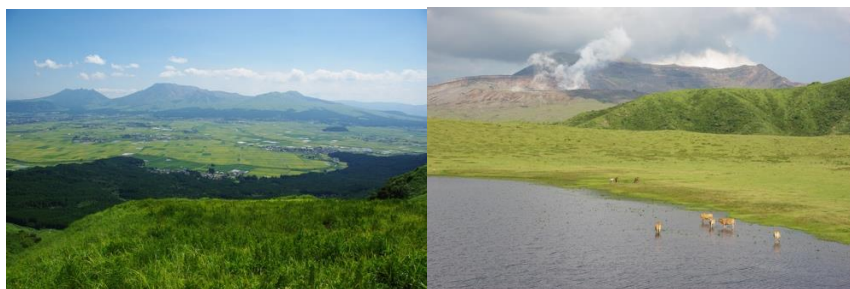
九州の中央北部、熊本県南小国(Minami-Oguni)町の黒川(Kurokawa)温泉は、日本の温泉地ランキングでは常にトップ10内に入る人気温泉地である。とくに若い女性たちに人気で、溪流のせせらぎの音やそよぐ風など自然環境に身を委ね、現在30軒ほどある温泉旅館がそれぞれ趣向をこらして造った個性的な「源泉かけ流し」(浴槽に常に新鮮な源泉を注ぎ入れ、浴槽のふちからあふれさせている方式)の露天風呂巡りを楽しみに全国から訪れる。これも湯量が豊富で、前回の秋田県乳頭温泉郷同様に各温泉旅館が自家源泉を備えているゆえにできることだ。



黒川温泉の露天風呂(以下提供：石川)

九州は日本でも北海道、本州の東北地方・北関東地方・静岡県伊豆半島・長野県と並び、とくに温泉資源に恵まれた地域である。九州では、別府温泉郷と由布院(Yufuin)温泉がある大分県だけで日本の総湧出量(251万8,113L(litre)／分：2019年統計)の11.7%を占め、続いて鹿児島県が第3位、熊本県が第5位の湧出量を誇る。源泉(湯元)総数でも、大分県が5,088本で日本全体の18.2%を占め、鹿児島県が2位、熊本県が5位にランクされている。

その熊本県は古くは「火の国」と呼ばれたように、面積約350km²と世界有数規模の阿蘇(Aso)カルデラで知られる。阿蘇カルデラはユネスコジオパークに認定、そして阿蘇くじゅう国立公園に指定されている。カルデラの中央部には中央火口丘群の「阿蘇五岳」が横たわり、中岳(標高1506m)からはたえず噴煙が上っている。一方でカルデラ内には約5万人が居住しており、田畑や牧草地帯が広がる中を鉄道と国道が走り、温泉地も数多い。黒川温泉は阿蘇カルデラを囲む外輪山北側に位置している。



阿蘇カルデラの阿蘇五岳(左) ・噴煙を上げる中岳と草千里に放牧の赤牛(右)

黒川温泉も火山地域の豊かな温泉の恵みを授かった。しかし交通不便な山峡の奥まった地にたたずんでいたせいも、1980年代までは訪れる観光客は少なかった。一軒宿の「秘湯」ではなかったが、団体旅行客全盛の日本の高度成長時代にも見過ごされた温泉地だった。現在の黒川温泉からは想像もつかない状況だったのである。

これを変えたのは、黒川温泉の旅館や店を継いだ若手・二代目世代である。進学や就職で都会に一度出て戻って来た息子・娘たち、彼らとの結婚等を機に黒川温泉にかかわるようになった人たちである。温泉地としての魅力をこれまでアピールしきれていなかった黒川温泉への危機感を彼らは共有していた。彼らは議論を重ね、旅館や店が自分だけ儲けよう、何とかしようとはばばらに動くのではなく、地元が協働して取り組んでこそ温泉地の共存共栄、発展の道が開けるという考えでまとまっていく。外の世界を体験した視点を活かしながら、中心となる地元組織である黒川温泉観光旅館協同組合の組織を刷新し、温泉地の魅力的な景観づくりや活性化に向けた協働の取り組みを始めるのだ。



黒川温泉の旅館群

なかでも旅館協同組合が地元産杉材を加工して共通の「入湯手形」を作り、1986年に販売を始めてから、黒川温泉は脚光を浴びるようになった。温泉パスポートにあたる入湯手形を1,300円(発売当初は1,000円)で購入すれば、加盟旅館のどの露天風呂も3軒まで入湯でき、3軒分の入浴料金はぐっと割安になる。しかも木製の愛らしい入湯手形は旅行の記念品として手元に残る。あるいは温泉街の中心に建つ地藏堂に祈願をこめて奉納もできる。

日帰り入浴客のためにはレンタル浴衣サービスもある。旅館からカラフルな浴衣と雪駄(下駄)の非日常的で開放的なスタイルで外に出て、昔懐かしい情緒が漂う温泉街を散策する体験は、都会から訪れた温泉観光客に大いに受けた。

「湯巡り」を通じて、泊まった旅館の中だけに閉じこもらず、温泉地の他の温泉宿や共同浴場も巡って入湯体験し、温泉地をじっくり散策することでお店にも立ち寄って買物や郷土メニューの食事してもらおうという試みは、日本の数ある温泉地の中で先の乳頭温泉郷と黒川温泉が早かった。乳頭温泉郷のほうは広大なブナの森に温泉宿が点在するため、ラフな浴衣がけに雪駄スタイルは無理だが、温泉街に旅館や店が密集して散策しやすい黒川温泉では浴衣スタイルこそ似合っている。



郷土メニューを案内する黒川温泉街の店先

黒川温泉の泉質も乳頭温泉郷に劣らず多彩で、単純硫黄泉(硫化水素泉)、酸性泉、硫酸塩泉、塩化物泉、単純温泉、含鉄泉の6種類がそろっている。そのため露天風呂・浴槽では湯の色も多彩で、泉質や成分の多寡、浴槽の広さ深さに応じて無色から薄く青緑がかつたり、薄茶色や青乳白色などを呈している。泉温が平均的に50℃~60℃くらいと高いのも、火山性の温泉資源に恵まれている証左だ。

しかし観光ブームが起きて温泉旅館の数が増えてからは、以前の自然湧出泉はなくなり、比較的浅くボーリングした掘削自噴泉や一部は動力揚湯泉となっている。温泉の湯脈は黒川温泉街を流れる小さな川の流域にほぼ沿っており、泉源域が狭いので、一つの旅館の湧出量と隣の旅館の湧出量が相互に影響、干渉し合う。この事実も自分の旅館だけを考へてはいけない、温泉地としてまとまって協力し合う必要性を支えている。



温泉街に旅館と並ぶ共同湯「地蔵湯」

湯巡り手形の発行は、さらに大きな波及効果をもたらした。売上が年々増加していくと、その収入を地元が協働して温泉地の魅力的な景観形成に使えるようになったのだ。黒川温泉の人たちは案内看板を環境に配慮して整理・統一し、温泉街に足湯や飲泉所を設け、共同浴場を整備し、旅館や温泉街を囲む里山に木を植え続けた。「上質な里山」のある温泉地の景観造りをたゆまず目指している。都会から訪れた客が安らげる、日本の懐かしい田舎家景観や情緒を保った温泉地づくりが目標なのである。

彼らの思いを表す言葉、コンセプトが「黒川温泉 一旅館」である。現在、黒川温泉にある 30 軒の旅館と温泉街に並ぶ店、周囲の里山風景すべてを「一つの旅館」と考え、一つひとつの旅館は「離れ部屋」、旅館をつなぐ小径は「渡り廊下」とみなして、訪れる客をみんなで、場全体で温かく迎え入れようというのだ。

黒川温泉は 2016 年 4 月の熊本地震による直接の被害はなかったが、交通アクセスは一時不便になった。むしろ風評被害によるツアーや宿泊中止が打撃だったが、めげなかった。地元が何事にも協働して立ち向かうというあり方は、こういうときにも強さを発揮する。何より地域資産である豊かな温泉資源を共同して守ることを前提に、魅力ある温泉地づくりに努める黒川温泉は、これからも人気温泉地であり続けるだろう。



黒川温泉の旅館和室

【温泉地 DATA】

- ・所在地：熊本県南小国町
- ・アクセス：福岡空港・熊本空港などから直行バス約 2 時間
- ・泉質：6 種類(本文参照)
- ・泉温／pH：49～94℃／pH2.8～8.2
- ・源泉数／湧出量／湧出形態：47 本／毎分約 2500L／掘削自噴・動力揚湯
- ・宿泊・温泉入浴施設：約 30 軒
- ・照会先：黒川温泉観光旅館協同組合 TEL0967-44-0076

文・照片：[石川理夫](#)

翻译修改：JST 客观日本编辑部